



馬耳東風

この星に推定69億の人口と三千万種の生き物が暮らす。人々は豊かさを求めてエネルギーを大量消費し、大地や海から食糧消費で収奪をつづけ、森林の減少と砂漠化が進行し人口は膨らむ。2050年の予測は91億人だという。当然ながら大気や水の汚染も進行している。国連は昨年を国際生物多様性年として、地球生きもの会議が名古屋市で開催され、危機感の共有と持続可能な利用の仕組みや遺伝資源の利益配分が焦点となり、各国が臨界点の前にと知恵を出し合い世界目標に向けて合意点を絞りこみ進展をみた。さらに今年は、国際森林年として新たな取り組みの年となる。人権や環境を守る取り組みは、多くの国家が主体的に取り組んでいるが、格差の現実的問題があり、市民社会や企業との連携による突破口を目指して、企業リーダーに対し国連グローバル・コンパクト（GC）が枠組され、CSR（企業の社会的責任）の基本原則への動きが活発化している。企業に限らず日本の大学も加盟しはじめた。入学時に学生宣誓を行うことから始まり、学問領域の貢献と責任ある地球市民教育に期待をかけている。まさに教育理念に基づいた献学の国際教育の実践に取り組みは始めている。

年頭にあたり、一体わが国が抱える課題にはどんなものがあるか、小宮山 宏東大総長顧問の著作を通して考えてみた。終戦後、狭い資源の乏しい国土に封じ込められながら懸命に働き、今や外国に進出し多くの企業が国

際成長した。エネルギーや資源、環境、廃棄物処理、高齢化と少子化、地域の過密と過疎、教育、財政、農林業と食糧、交通、防衛など日本が抱える問題はどうか世界に先駆けているものが多いようだ。特に製造業や金融の国際企業への傾斜は、資本分母の拡大とあわせて寡占化の傾向にあるようにみえる。わが国の長期の平和による社会保障や文化への蓄積は実に先端的である。家屋や自動車のような人工物は国内では既に飽和域にあり、環境や経済効率に向けた太陽光や原子力発電に見る非化石エネルギー時代への研究開発が進行しつつある。廃棄物からのレアメタルリサイクル技術には素晴らしいものがある。公害といわれた時代を乗り越え、新しい環境技術は生物多様性の恵みを受け止めている。例えばカワセミのくちばしから騒音を軽減した新幹線の鼻、トンボの羽から風力発電のプロペラのヒントなど自然の理にかなった研究開発は、日本技術の最も得意とするところでアジアの核として成長するだろう。

世界一の高齢化社会は、その社会システムと医療分野で先鞭を付けつつあり、少子化や教育における課題も前向きに取れる。食糧自給率の向上は、食の安全と生物多様性や多面的機能からのアプローチが求められてきた。多くの若者が高等教育の恩恵をこうむり、知識の爆発は、歴史に学びながら本質を探り出し、柔軟な頭脳をもつアジアのフロンティアランナーでありたいと願う。国中を沸かせた栄えあるノーベル賞受賞が見事に実証しているではないか。（柏）